

目的 食物に対する料理意欲とその料理意欲に關与する諸要因について調べること、一般家庭での食生活の一端を知ることとを目的とした。

方法 日常よく食べられる食物40種を選び、当短大1年生60名とその母親を対象として調査を行なった。料理意欲度の評価については、その意欲度の最も高い場合と5とし、順次低くなるにつれ、4, 3, 2, 1の5段階とした。ただし評価5, 4, 3は料理意欲度は正であり

2, 1は負である。それに関与する要因は、嗜好、栄養、習慣、経済、特別な時、調理性の6種とした。意欲度評価正の場合はその評価に最も關与する順に前述6種の要因の中から1, 2, 3の順位をつけさせた。一方、それか負の場合はその理由をそれら6種の中から1種選ばせた。更に6要因の中の一、嗜好について、この料理意欲度との關係をより明らかにするため、40種の食物の嗜好度(5段階の嗜好尺度)を調べ、それらの相関關係を調べた。

結果 40種の食物の平均料理意欲度の平均値および標準偏差値は、短大生群では3.01, 0.93で、母親群では3.11, 0.90であり、総じてこの料理意欲度およびその意欲度のバラツキ具合は両群にほとんど差がなかった。しかし、個々の食物に対する料理意欲度はもちろん両群にかなりの差がみられた。たゞその最も高いベスト3は両群ともほとんどみえ計とサウサであった。その要因については、料理意欲度の高い食物群では、嗜好、習慣、栄養、調理性の4種が同程度關与し、時に意欲度が高くなると習慣の比重が大きくなり、この群では、嗜好の比重があまり大でないか、料理意欲度の低い群の食物では、調理性と特に嗜好の要因がその意欲度に関与した。このことは料理意欲度と嗜好度の相関係数から裏付けられた。